

# 大学生の自己意識的感情経験の中日比較

○黄黎雯・井上弥

(広島大学大学院教育学研究科)

## 問題・目的

失敗をして、他者に迷惑をかけるなど、社会的苦しい状況に陥るとき生起する感情には恥と罪悪感の2つがある。Ferguson (1999)によると、恥と罪悪感、誕生してすぐに見られる怒りや悲しみなどの基本的な感情とは質的に異なり、社会的、自己意識的もしくは自己評価的である。また、有光 (2002)によれば、罪悪感を喚起する状況は他傷、他者配慮不足、利己的行動、他者への負い目の4因子で、他者への負い目は日本の青年のみで見られる。

このように自己意識的感情は自分についての感情なので、文化によっても異なる。同じ状況でも同じ自己意識的感情を感じるとは言えない。そこで、本研究では、日本人と中国人が同じ状況で、恥と罪悪感をどの程度感じるかを比較して、状況と恥および罪悪感を感じる程度の対応関係を検討するために、罪悪感喚起状況を収集し、罪悪感喚起状況を整理することを目的とした。

## 方法

**調査対象者** 日本人大学生22名(男6名,女16名)。  
**質問紙** Tangney (2002)を参考に、罪悪感を喚起するできごとの自由記述を基に12場面を作成した。各場面について、「あなたが次のことをしてしまったとしたら、どんなことを感じますか」と問い、恥、罪悪感、無視、プライドを感じる程度を「全く感じない」～「非常に感じる」の5段階で評定させた。

## 結果と考察

恥、罪悪感、無視、プライドそれぞれの評定を基に、12場面のクラスター分析 (Euclid 平方距離, Ward法)を行った。

恥の第1クラスタは「今日の時間を無駄にして、情けないと思う」「友達を待たせて、悪かったと思う」「私は友達に迷惑をかけて、悪かったと思う」「私は友達に徹夜させて、すごく迷惑をかけたと思う」など友達に対する迷惑であった。第2クラスタは「先輩にたくさんのお金を使わせてしまって、情けないと思う」「大学生にもなって、両親のお金に頼っているの、情けない人間だと思う」「奨学金をもらう資格がないと思う」とい

うお金に関する項目であった。第3クラスタは「自分は情けない人間だと思う」「持ち主のことも考えないなんて、自分は思いやりのない人間だと思う」という思いやりに関する項目であった。第4クラスタは「先生と会うのを避けようと思う」「面目が立たず、両親に顔を合わせたくないの、家に帰りたくないと思う」という目上の人に関する項目であった (Figure 1)。

罪悪感では第1クラスタは、「今後、同じことがあれば、自分で解決しようと思う」「翌日、みんなにお菓子をあげて、謝っていこうと思う」「明日から、学習のスケジュールどおりにちゃんと勉強しようと思う。」などの項目が含まれていた。第2クラスタは、「見つけたところに戻って落し物を拾い、持ち主に届けようと思う」「怒鳴ってしまい両親に申し訳ないので、ちゃんと謝ろうと思う」「自分で宿題をやり直して、先生に提出すると思う」「暇な時に、アルバイトをして、親の負担を減らすと思う」という項目が含まれていた。第3クラスタは、「先生に申し訳ないのでいい成績をとることを約束しようと思う。」第4クラスタは、「今度は私が先輩にご馳走しようと思う。」という項目が含まれていた。

以上のように、感情によって、異なるクラスタにまとまることが示された。

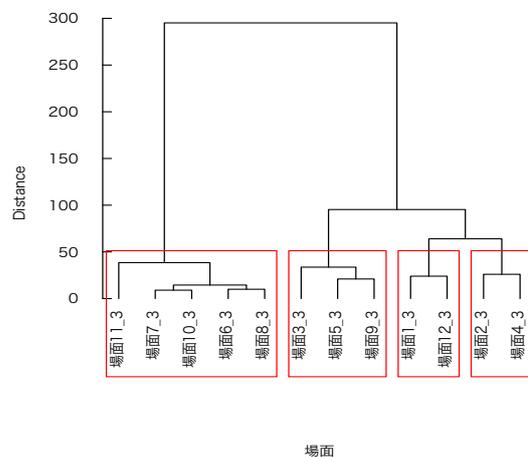


図1 恥の場面のクラスタ